



贗作幽靈預言者

tontokaimo39

賈作幽靈予言者

「確認して来ました、通報者の言った通りで、まず間違いありません」

「そうか、どう言う男だ？」

「名前は山本健一、年齢三十八、ともかく無口な男で、仕事以外では誰とも付き合わずいつも一人でいたと言うことです」

「ふうん、それで？」

「一年ほど前、突然仲間に加わったと言うことですが、作業員たちは、それ以外何も知らないのです、人事担当者に聞いたところ、出身は秋田県、フラリトやって来て雇ってくれと言う、ちようど手が足らなかつたので雇ったが、どうせ出稼ぎだろう、三か月もすれば辞めるに違いないと思っていたのが、意外と続いていたと言うことです」

「なるほど、それで防犯カメラの映像は？」

「作業員十三人に見せました、内八人は間違いな

く山本だと言い、残りは、似ている、ですね、違
うと言った者は一人もいません、写真もありまし
た、工事現場に出入りする身分証明書のために採
用の際に写したものだそうです」

「これか、ふうん、間違い無いようだな」

「犯行の日以来姿を消しているんですからね、容
疑者として指名手配ですか？」

「いや、物的な証拠が無いから重要参考人として
だ、マスコミにもその点は念を押しておいてく
れ」

「ねえ、由美ちゃんどこにいるんだろう？」

「かわいそう、きつと泣いてるね」

「由美ちゃんって、本当に可愛かったよね、ほら
およばれ給食の時」

「うん、『トンボの眼鏡は水色眼鏡：』って、

「一生懸命歌ってくれたんだ」

「ねえ真子、刑事のお父さんどう言ってるの」

「手がかりは何も無いって、今朝も暗いうちから出て行ったわ」

「夕子、どう思う？」

「うん、心配しなくても無事帰って来るよ」

「えっ！」

「夕子、それ本気！」

「本気だよ、心配いらないよ」

「でも、どうして？由美ちゃんどこにいるの？」

「それは今わからないけど、日曜になったらわかるよ」

「えっ！どうしてよ？それって預言？」

「預言なんかじゃないよ、でも、ちよつと」

「もう公開捜査に踏みきった方がいいと思うの」

ですが、地区の者は皆知っていることですし、マスコミもまだ報道できないのかとうるさく言っていますし」

「今日で三日目、身代金目的ならまだ何も言っていないのはおかしいですよ、と言うより母一人子一人の家庭でしょう、父親は一年前から行方不明で、母親が必死で働いているんです、身代金目的とは初めから考えられない」

「ああその通りだ、だがな、公開捜査は危険が伴う、身代金なら警察に知らせた報復と言うことだが、そうで無くても、警察が捜査に乗り出したと言うことを知った犯人が、慌てて犯行を隠そうとしたためにまずい結果に終わった例も少なくないんだ：もう一日だけ待ってみよう、ともかく今日も全力で当たってくれ」

「おっ夕子君」

「あつ真子のお父さん、今日は！」

「いいところで会った、なあ夕子君、ちよつとおじさんにつき合ってくれないか？」

「えっ、真子のお父さん私を誘惑するの、真子のお母さんが怒るよ！」

「ハハハ参ったな、ほらちようど喫茶店があるケーキでもどうだい？」

「それ賛成！でもそれって真子が怒るよ」

「そうか、よし真子には内緒だ」

「真子に聞いたのだけど夕子君、君は『由美ちゃん心配しなくても無事帰って来るよ』と言ったそうだね、みんな心配してるんだ、夕子君も無事であつてほしいと願ってるんじゃないか、真子もそうだろうと言うとね、真子は『夕子は願いだ

「だったら願いと言うよ、そうでなくてはつきり心配無いと言ったの、夕子は絶対にでたらめを言わないから、きつと何か根拠があるんだよ」と言うんだな、だけどそれを聞いても、君は『ちよつと』としか言わなかったそうだが、その、ちよつと、を教えてもらえないかと思ってね」

「ふうん、真子そんなこと言ったの、でも真子のお父さん、いいの？警察が小学生に聞いたなんて誰かに笑われても」

「ハハハそれはいいよ、君には前にも助けてもらったじゃないか」

「そう、仕方ない、ケーキもう食べちゃったから、これって刑事さん側は贈賄で私は収賄って言うんでしよう」

「おいおい、かなわないな、君には…」

「じゃあいっしょに学校へ行つてね」

「えっ、今日は土曜日だ、休みじゃあないのかい」
「うん、だれか先生がいるよ」

「あつ小百合先生、今日は」

「夕子ちゃん、どうしたの？あら、この方は？」

「真子のお父さんだよ」

「真子がいつもお世話になっていきます」

「あつこちらこそはじめまして、あの、真子ちゃんのお父さんって刑事さんだとうかがっていますけど、やはり由美ちゃんのことです？」

「そうなんです、夕子君に誘われましたね」

「あら誘ったのは刑事さんだよ、フフ、ケーキの賄賂で」

「あつそうか、いや参ったな…で夕子君これからどうするんだ？」

「先生、一年三組の教室入っていい？」

「由美ちゃんの教室ね、担任の武本先生由美ちゃんのお母さんの所へ行ってあげているの、でも教室に入るのはかまわないわ」

「ほう、かわいい絵が並んでいますね、夕子君や真子も一年生の頃はこんなかわいい絵を描いていたんだなあ」

「真子のお父さん、そんなことはいいからよく観察して」

「うん？」

「この絵、一年生の三クラス共通のテーマで描いたのです、こんなことできたらいいな、って」

「ハハハ、それで大きなケーキを食べてる子がいるのですか、アンパンマンやパンダが大勢いますね」

「アンパンマンやパンダと遊べたらいいなと言

うことですわ」

「ねえ、二人で鑑賞会してるんじゃないよ、ほら右端の下から二番目が由美ちゃんの絵」

「あら、みんなのとは少し違ってるわ、二人の人が手をつないでいるところね…」

「小さい方が由美ちゃん」

「大きい人は男の人ね、ズボンを履いてるようだから」

「そう、由美ちゃんのお父さん」

「うん？お父さんは行方不明のはずだが…」

「まあ：由美ちゃん、お父さんと手をつないで遊べたらいいなと思って…」

「よく見てよ、ほら、後ろの建物の玄関らしいところにある大きな丸が二つ、それに屋根の上にも」

「あっわかったわ、これトンボ村のトンボの家ね、都内でも飛んでいるトンボが見えると言うこと

でつくられたトンボ村、トンボの家はトンボ博物館のようなもの、一年生の遠足にどうかなあと下見に行ったことがあるのです、結局少し遠過ぎるってことになったのですけれど」

「じゃあ由美ちゃんは、お父さんといっしょにトンボ村に行きたいと言うことですか…」

「違うよ、もう行ってるんだよ」

「何？どうして？」

「夕子ちゃん、それどう言うことなの？」

「ほら、風船が付いた旗が立ってるでしょう」

「ええ…」

「私もね、トンボ村に行ったことがあるの、でも旗なんて無かったわ、だからトンボの家に電話して確かめてみたの、『あの旗はこの前のトンボ祭りの時初めて立てたんですが、祭りが終わった後は仕舞っています』だって、由美ちゃん、まだ行

ってないのなら、どうして旗のこと知ってるのよ」

「ううん？」

「そうか：私が行った時も確かに旗は無かったわ、あつそうだ！一年生ね、朝の自由学習の時間に毎日日記を書いてるんです、家だどうしても書き忘れる子がいるでしょう、由美ちゃん、もしかして：」

「なるほど日記ですか、それに書いてあれば：」

「あつたわ！ほらこれ！

おとうさんとトンボまつりに行きました。大きなわたあめを食べました。おひるは、おうどんを食べました。トンボの家のいりぐちには、大きなまるがふたつついていました、まるをふたつ書いたはたがいつぱいたててあります、あ

れはトンボのめだまのしるしだよと、おとうさんがおしえてくれました。わたしはトンボのめがねだなとおもいました。たのしかったです。まるがふたつのおまつりだけど、こんどはみつつのやくそくをしました。

「由美ちゃん、本当にトンボ祭りに行ってるんだわ！」

「ううん：そう言うことになりませぬ、そうか！それで夕子君、君は、由美ちゃんは今度もお父さんと一緒にいるんだと：」

「由美ちゃんね、およばれ給食の時にトンボのめがねの歌を歌ってくれたの、トンボ村に行ったことがよほどうれしかったんだと思うよ」

「およばれ給食と言うのは、上級生を何人か招いて一緒に給食を食べる会です、上級生からはおよ

ばれ、一年生からはおまねき給食、じゃあ夕子ちゃん由美ちゃんのクラスに行ったのね」

「うん、その時、由美ちゃんの絵はほかのみんなと違ってるなと気づいてたわ、そのあと由美ちゃんがいなくなったでしょ、だから確かめたのよ」

「それで、みんなに、由美ちゃんは心配ないと…」

「そう、でも由美ちゃんのお父さん、家に帰っていないでしょう、何かわけがあるのね、だったら、日曜までそつとしておいてあげた方がいいんじゃないかと思っただわ、だから陽子や真子たちにはお父さんのことは話さなかったの」

「うん？日曜までって、どう言うことだい、明日は日曜だよ」

「うん、ねえ真子のお父さん、明日もう一度私とデートしない、今度は真子も一緒に」

「ううん？」

「そうしたら由美ちゃんがきつと見つかるよ」

「と、言うことです、念のため由美子の母親に会って、先の日曜日のことを聞いてみました、由美子のお昼だけ用意して店に出ていたと言うことです、休みの日でも割り当てで出なければならぬことがよくあって、子どもも慣れていたそうですね、ただいつもと違ってお昼を食べていなかったと言うことです、近所に仲良しの友達がいるので、よくごちそうになることがあるので、その日もそれだと思っていたそうです」

「ふうん、おうどんを食べました、と言う日記と矛盾しないわけだな」

「そうです、それからこれが父親の写真です、捜索願いが出された時にも出してもらっているもので、署に一枚あるはずなのですが」

「そうか、うん？待てよ！おいみんな来てみろ！」

「あつ、この男は！」

「コンビニ強盗じゃないですか、N署が指名手配している！」

「間違いないですよ、N署に知らせますか」

「待て！あの日曜日には子どもを連れてトンボ祭りに行ってるんだらう、強盗をやったのは何時ごろだ？」

「十時過ぎと聞いています、普段でも住宅街ではないので朝は出勤者で賑わい、十一時を過ぎると昼食を求める客で混雑するものの、その間の客はほとんどない、それに日曜だったのですから、幸い客は一人もいなかったと言うことです」

「十時だとすると、この男が強盗をやれるか？」

「トンボ村に行つて、昼食を食べているのが本当

だとすると、到底無理ですね」

「わかった、宮本、N署だ、竹下と根岸はトンボの家に行ってくれ、今からでは少し遅いな、電話してから行け、それから根岸！明日はその夕子とか言う子とデートしろ」

「夕子、キッズフェスティバルと言っても、あのポスター幼稚園から二年生までが対象と書いてあったじゃないの、私たち五年生よ」

「一年生と一緒に踊るためじゃないよ、由美ちゃんを探すの、真子も由美ちゃんを知ってるでしょ、私一人で探すよりいいと思って」

「夕子君それだ、由美ちゃんがどうしてそこにいると」

「由美ちゃん、日記に書いてたじゃない、今度は三つの約束したよ、って」

「ううん？」

「ほら、丸が三つ」

「わかった、夕子、それ三輪公園のことでしょう、フエステェバル会場の」

「そうよ、案内のポスター丸が三つ描いてあるじゃない、由美ちゃんあれを見たのよ」

「そうか、私は何かの約束を三つしたと言うことだろうと思っていたんだが」

「由美ちゃん、日記書いてるなんて知らなかったわ、でも三輪公園に行くんだなと言うことは、日記を見る前からわかってたの、だから真子にも言ったでしょ、由美ちゃんのいるところは日曜日にわかるって」

「しかし、どうして？」

「私ね、由美ちゃんの絵の裏を見たの、そうしたら三つの輪やお父さんなんか描きかけになっ

てたの、あの絵の題は、できたらいいな、でしよ、約束通りお父さんと三輪公園に行けたらいいなと言う絵を描こうとしたのね、でもまだ行ってないのでどんなところかわからない、だから楽しかったトンボ村の絵に変えたんだと思ったの」

「わあ！大勢来てる！これじゃ由美ちゃんどこにいるかわからないよ…」

「ほんと、陽子たちもさそって、みんなで探せばよかった」

「困ったな、どこだろう？」

「夕子お姉さん！」

「あつ、由美ちゃん！」

「わあ、真子お姉さんもいる、お姉さんたち踊りにきたの？」

「う、うん…由美ちゃん、探したのよ、由美ちゃ

んは私たちがよくわかったわね」

「すぐわかったよ、お姉さんたち大きいから」

「そうか、小さい子はいっぱいだけど高学年は二人だけだから目立ってたんだ」

「で、由美ちゃん、お父さんは？」

「ほら、あそこのベンチにいるよ」

「ああ、あの人ね」

「そうか、あの男性だな」

「あつ、真子のお父さんちよつと待って！」

「うん？どうして…」

「あなた！」

「と、俊子…」

「わあ！お母さんも来てたんだ！」

「由美ちゃん、よかったね、三人になれて」

「気が付いたら、病院のベットの上でした、と

ところが、どうしてそんな所にいるのかわからない、それどころか、自分が誰だかわからない、自分の名前が思い出せないのです。

退院すると会社の寮に入りました、そこで私はの名は山本健一、その会社の作業員だと教えられました、ちよつとした事故で入院してもらったと言うのです。

後で、事務をしている女性がそつと教えてくれたところによると、本当の私は山本でもなければ社員でもない、偶然工事現場を通りかかった私の上に建材が落ち、それが頭に当たったのだそうです、しかし会社は、私が記憶を失っていることを知って、作業中自分で何かに頭をぶつけたと言うことにして、会社の責任になる事故を隠してしまつたと言ふことでした。

しかし、私はそれについて、何も言わず知らな

い振りをしていました、自分のことは何もわからない、これからどうすればいいのか、どこに帰ればいいのかもわからない、寮を出ても寝るところもないのですから、そのまま働いている方がよかったです。

ただ自分が何者かは知りたかったです、そこで休日には事故にあったあたりを中心に、あちこちをぶらぶらと歩きました、誰か、元の私の知人にでも出会わないか、そして何かがわからないか、それが目的でした、そして先の日曜日のこと、歩いていると突然『お父さん！』と呼ばれたのです。

お父さんだと！見ると小さな女の子でした、じやあこの子は？いや人違いをしているのか？一瞬判断に迷いましたが、ともかく聞いてみようとする子どもの手を取ろうとしたとき、通りがかりの人

から、不審そうに眺められているのに気づきました、相手は女の子だ、不審者とみられてもおかしくはない、それに気づいて思わず、あ、そうだほらそこに出ているトンボ祭りに行かないか？と言ってしまった、すぐ前に張ってあったポスターが目に入ったからです、子どもは『うん、行く行く』と喜んだので、すぐタクシーを拾いました。

祭りの会場でいろいろと聞き出しました。もつと大きな子だとおかしいと思われたでしょうが、大勢の人だな、もし迷子になったら、お父さんやお母さんの名前が言えるかい、住所は？などと聞くと、『だいじょうぶだよ』と、すらすらと答えてくれたのです。

二人が出会ったところまで帰ったとき、私は迷いました、この子が本当にわが子なら、私の本名

も妻の名も、住所までわかったことになります、ところが、ただそれを知ったと言うだけで実感は何もわからないのです、ほかのことを思い出すことも何もない、この子の家まで行って、人違いだつたら騒ぎになるでしょう、本当だつたとしても記憶がないままで帰っていいのだろうか？と言うことでした。そこで私は、手がかりは得られたのだ、もう少し調べてみよう、自分で確信が持てるまでと考えました」

「由美子、お父さんはね、今とても大事な仕事をしてるんだ、だからもうしばらく帰れないんだよ、お母さんがびっくりするといけないから、今日のことはお母さんには内緒にしていってくれないか、あつそうだ、今度はほら、そこに張つてあるポスターのキッズフェスティバルに行こう、今度の日曜だと言うと少し不信そうでしたが、『本

当、本当に連れてつてくれる』本当だよ、約束しよう、代わりにお父さんのお願いも守ってくれるねと頼むと『うん、約束する』と言うことで別れました」

「帰った私は、すぐ寮を出ました、ここには毎日仕事だ、それでは自分探しができなくなってしまう、そう思うと、手続きも何もしないで寮をとびだしたのです、少し興奮していたせいもあったのでしよう」

「その夜は、ある飲み屋の二階に泊まりました、おばさんが一人で切り盛りしている小さな店ですが、そこには仕事仲間が行かないことを知って、私は毎日のように通っていました、仲間にいるいろと尋ねられるのが嫌だったからです、おばさんは、私が記憶喪失だと言うことを知っていました、いろいろと親切にしてくれるので話したのです、

今日、娘らしい子に会ったと言うとおばさんは驚いていたようですが、会社は辞めた明日からは自分が何者かを本気で調べる、事故の見舞いだと給料以外にも少しもらっているから、当分は何とかなるのだが、どこか安い宿はないだろうかと言う意味のことを話すと『うちの二階が空いているから、そこを使いなよ、閉店後は一人だからいつも心配でね、男がいてくれると心強い、料金なんかいいからさ』と喋ってくれたので甘えることにしたのです」

「翌日、昼食を食べながらテレビを見ていて驚きました、私が、コンビニ強盗の容疑で指名手配されている、山本健一と言う名前も顔写真も出ているのです、防犯カメラに写っている犯人の姿は、確かに私によく似ていました、これを見た会社の同僚が通報したのでしよう。そんな馬鹿な！と、

すぐ警察へ駆け込もうとしたのを止めたのはおばさんでした、『待ちなさいよ！指名手配までした警察が、身に覚えがないといってもすぐ信用するわけがないだろう、留められてしまったらどうするの、せつかく娘さんらしい子に会って、手がかりが掴めたと言うのに、しばらく様子を見てる方がいいと思うね』と言われたのです」

「結局警察には行かず隠れるようにしていたのですが、我慢できなくて、あの子の言った住所の近くをうろろしたのが金曜日でした、そこでまたあの子に出会ってしまいました。大きなマスクで顔を隠していたのにあの子にはわかってしまったのです、『お父さんのところへ連れてって』だめだよ、お父さんね、今大事な仕事なんだといくら言ってもこんどは『嫌だ』と言うばかりで聞かないのです、日曜日に会った時のような元気

はなく、聞き分けようとしなくてぐずるばかり、学校で先生に叱られるか、友達と喧嘩でもしたのでしょうか」

「大きなマスクの男と嫌がっている少女、それを見た人に交番へ通報でもされたら：先の日曜のことだったらその子が『お父さんだよ』と言ってくれただけで済んだでしょう、しかし今の私は、指名手配をされている身です、仕方なく飲み屋に連れて行きました『かわいい子じゃないの』おばさんは驚いたもののすぐ優しく接してくれました、そして店を閉じると、いろいろと話しかけ、聞き出してくれました、私のように名前や住所だけを聞いたわけではありません、『ねえ、お父さんとお母さんと一緒に動物園に行ったことはないの？』『海に泳ぎに行かなかった？』『病気になったことあるでしょう、お母さん優しくしてくれた

んじゃないの?』由美子は思い出しながら『うん、行ったよ』などと素直に答えています、それを聞いているうちに、私もなんとなく思い出してききました、そうだ：あの時由美子が迷子になったのだ：慌てて探していると『かわいいおじょうさんが、迷子のお父さんとお母さんを探しています』と言う放送があつて付近の人がみな笑つた：最初は海を怖がつたのに、砂遊びに夢中になつて、帰ろうと言つても嫌だと駄々をこねた：真夜中に高熱を出して慌てさせた：由美子が話したのではありません、私の頭の中に浮かんできたのです、由美子だ！間違いない！由美子だ！霧が晴れると言う表現がこれでしょうか、私はほぼ全てのことを思い出しました、と、同時に、母親が、いや妻が心配しているに違いないと気づきました、帰さなくては！しかもう暗くなつていました」

「翌日すぐ連れて帰ろうと思いましたが、一晩泊めたのですから、内緒にしては通じません、それはかまわない、もう自分の正体がわかったのだから！『だけど、由美ちゃんや奥さんの前で警察に連行されることになってもいいの、まさかとは思うけどね、警察に行くならここから一人で行った方が、由美ちゃんは私がそつと帰してあげるから』おばさんがそう言ってくれたので、それはそうだと頼もうとしたのですが、それを止めたのは今度は由美子でした、『お父さん、キッズフェスティバルあさつてだね、早くあさつてになったらいいね』私はハツとしました、そうだと約束があったのだ、警察に出頭すれば、まず約束を守ることができないだろ、しかし妻が：私は迷いに迷いました、『そりゃあお母さん、死ぬほど心配してるだろうね、よくわかるよ、でもねえ、ここはお父

さんとして娘との約束を守った方がいいんじゃないの……』と言ってくれたのはおばさんでした」

「我が家に帰ったのはほぼ一年ぶりでした、刑事さんに、指名手配の間違いがわかったのは、夕子君のおかげだと教えられました。夕子君は由美子がもつと小さかったころから遊んでくれて由美子は『夕子お姉さん、お姉さん』と呼んで懐いていましたから、私もよく知っていました」

「夕子君の所に、由美子と妻の三人でお礼に行つたところ、夕子君は、『私じゃないよ、お父さんは悪いことなんてしてないって証明したのは由美ちゃんだよ』と言って、自慢そうな顔一つしないのです、由美子が絵を描いたからと言うのですが、それを読み解いたのは夕子君でしょう夕子君は本当にすごい子ですね」

「たった一枚の絵から、由美ちゃんはお父さん
という、日曜日には会えると預言して、ぴたりと
当てたんだ、まったく夕子君と言う子は…」

「お父さん、夕子が怒るよ、夕子はね、預言なん
かしないって前に言ったでしょう」

「あつそうだったな、取り消し、預言者は幽霊に
なってもらって、かわりに名探偵の登場だ、そう
だ、公園に由美ちゃんのお母さんを呼んでいたの
も夕子君だろう」

「そう、由美ちゃんのお父さん、由美ちゃんに会
っていながら家に帰っていない、それじゃあ由美
ちゃんかわいそう、どんなわけがあるのかはわか
らないけど、お母さんに会ったら帰るんじゃない
かなと思ってたって」

「そうか、そうだ、由美ちゃんたち、夕子君にお
礼に行ったそうだな、私も行かないと」

「夕子ね、日曜日のキッズフェスティバルに行く
と由美ちゃんに会えると言う手紙を由美ちゃん
のお母さんの買い物籠にこっそり入れたのね、で
も後は何も知らない振りをしてるつもりだった
って」

「ううん、それじゃあ夕子君を引っ張り出したの
は迷惑だったのかな？」

「だいじょうぶよお父さん、夕子喜んでたわ、由
美ちゃんのお父さん、自分が手配されてること知
ってたんでしよう、『真子のお父さんが、手配は
取り消しだと話さなかったら、また姿を消してた
かも、消えてなくても、警察へ出頭するといっ
て、由美ちゃんやお母さんを驚かせてるわ、三人がそ
ろって無事家に帰ったのは、真子のお父さんのお
かげよ』だって」

「そうか、お父さんも少しは役にたったんだな」

「フッフ、本当は夕子に利用されたのよ」

「何！」

「夕子ね、由美ちゃんがまだ小さいころから遊んであげてたから、由美ちゃんのお父さんの顔知ってたの、そのお父さんが指名手配になってるのを、テレビで見て驚いたって、『コンビニに強盗が入った日と、由美ちゃんがトンボ祭りに行った日は同じでしょ、警察は間違ってると思うわかったわ、でも私には何もできないでしょ、だから真子のお父さんをちよつとね』だって」

「なんだと！夕子君、ケーキを食べたから仕方ないとか言って…本当は私の方が引つ張り出されることになっていたのか…」

「あつ、お父さん！夕子とケーキ食べたの、ずるい！」

「バレたか、よしこれから夕子君をさそってケー

キを食べに行こう、真子もいっしょに」

「だめ、夕子いないよ、由美ちゃんのお父さんが、夕子のことをテレビ局に話したのね、それで記者が押し掛けたの、夕子『しばらく幽霊になってる』
とって、親戚の家に行ってしまったわ」

了

賈作幽靈予言者

「確認して来ました、通報者の言った通りで、まず間違いありません」

「そうか、どう言う男だ？」

「名前は山本健一、年齢三十八、ともかく無口な男で、仕事以外では誰とも付き合わずいつも一人でいたと言うことです」

「ふうん、それで？」

「一年ほど前、突然仲間に加わったと言うことですが、作業員たちは、それ以外何も知らないのです、人事担当者に聞いたところ、出身は秋田県、フラリトやって来て雇ってくれと言う、ちようど手が足らなかつたので雇ったが、どうせ出稼ぎだろう、三か月もすれば辞めるに違いないと思っていたのが、意外と続いていたと言うことです」

「なるほど、それで防犯カメラの映像は？」

「作業員十三人に見せました、内八人は間違いな

く山本だと言い、残りは、似ている、ですね、違
うと言った者は一人もいません、写真もありまし
た、工事現場に出入りする身分証明書のために採
用の際に写したものだそうです」

「これか、ふうん、間違い無いようだな」

「犯行の日以来姿を消しているんですからね、容
疑者として指名手配ですか？」

「いや、物的な証拠が無いから重要参考人として
だ、マスコミにもその点は念を押しておいてく
れ」

「ねえ、由美ちゃんどこにいるんだらう？」

「かわいそう、きつと泣いてるね」

「由美ちゃんって、本当に可愛かったよね、ほら
およばれ給食の時」

「うん、『トンボの眼鏡は水色眼鏡：』って、

一生懸命歌ってくれたんだ」

「ねえ真子、刑事のお父さんどう言ってるの」

「手がかりは何も無しだって、今朝も暗いうちから出て行ったわ」

「夕子、どう思う？」

「うん、心配しなくても無事帰って来るよ」

「えっ！」

「夕子、それ本気！」

「本気だよ、心配いらないよ」

「でも、どうして？由美ちゃんどこにいるの？」

「それはわからないけど、日曜になっただらわかるよ」

「だからどうしてよ？それって預言？」

「預言じゃないよ、でも、ちよつと」

「もう公開捜査に踏みきった方がいいと思うの」

ですが、地区の者は皆知ってることですし、マスコミもまだ報道できないのかとうるさく言っていますし」

「今日で三日目、身代金目的ならまだ何も言っていないのはおかしいですよ、と言うより母一人子一人の家庭でしょう、父親は一年前から行方不明で、母親が必死で働いているんです、身代金目的とは初めから考えられない」

「ああその通りだ、だがな、公開捜査は危険が伴なう、身代金なら警察に知らせた報復と言うことだが、そうで無くても、警察が捜査に乗り出したと言うことを知った犯人が、慌てて犯行を隠そうとしたためにまずい結果に終わった例も少なくないんだ：もう一日だけ待ってみよう、ともかく今日も全力で当たってくれ」

「おっ夕子君」

「あつ真子のお父さん、今日は！」

「いいところで会った、なあ夕子君、ちよつとおじさんにつき合ってくれないか？」

「えっ、真子のお父さん私を誘惑するの、真子のお母さんが怒るよ！」

「ハハハ参ったな、ほらちようど喫茶店があるケーキでもどうだい？」

「それ賛成！でもそれって真子が怒るよ」

「そうか、よし真子には内緒だ」

「真子に聞いたのだけど夕子君、君は『由美ちゃん心配しなくても無事帰って来るよ』と言ったそうだね、みんな心配してるんだ、夕子君も無事であつてほしいと願ってるんじゃないか、真子もそうだろうと言うとね、真子は『夕子は願いだ

「つたら願いと言うよ、そうでなくてはつきり心配無いと言ったの、夕子は絶対にでたらめを言わないから、きつと何か根拠があるんだよ』と言うんだな、だけどそれを聞いても、君は、ちよつと、としかいわなかったそうだが、その、ちよつと、を教えてもらえないかと思ってね」

「ふうん、真子そんなこと言ったの、でも真子のお父さん、いいの？警察が小学生に聞いたなんて誰かに笑われても」

「ハハハそれはいいよ、君には前にも助けてもらったじゃないか」

「そう、仕方ない、ケーキもう食べちゃったから、これって刑事さん側は贈賄で私は収賄って言うんでしよう」

「おいおい、かなわないな、君には…」

「じゃあいっしょに学校へ行つてね」

「えっ、今日は土曜日だ、休みじゃあないのかい」
「うん、だれか先生がいるよ」

「あつ小百合先生、今日は」

「夕子ちゃん、どうしたの？あら、この方は？」

「真子のお父さんだよ」

「真子がいつもお世話になっていきます」

「あつこちらこそはじめまして、あの、真子ちゃんのお父さんって刑事さんかどうか聞いていますけど、やはり由美ちゃんのことです？」

「そうなんです、夕子君に誘われましたね」

「あら誘ったのは刑事さんだよ、フフ、ケーキの賄賂で」

「あつそうか、いや参った：で夕子君これからどうするんだ？」

「先生、一年三組の教室入っていい？」

「由美ちゃんの教室ね、武本先生由美ちゃんのお母さんの所へ行ってあげているけど、教室に入るのはかまわないわ」

「ほう、かわいい絵が並んでいますね、夕子君や真子も一年生の頃はこんなかわいい絵を描いていたんだなあ」

「真子のお父さん、そんなことはいいからよく観察して」

「うん？」

「この絵、一年生の三クラス共通のテーマで描いたのです、こんなことできたらいいな、って」

「ハハハ、それで大きなケーキを食べてる子がいるのですか、アンパンマンやパンダが大勢いますね」

「アンパンマンやパンダと遊べたらいいなと言

うことですわ」

「ねえ、二人で鑑賞会してるんじゃないよ、ほら右端の下から二番目が由美ちゃんの絵」

「あら、みんなのとは少し違ってるわ、二人が手をつないでいるところ…」

「小さい方が由美ちゃん」

「大きい人は男の人ね、ズボンを履いてるようだから」

「そう、由美ちゃんのお父さん」

「うん？お父さんは行方不明のはずだが…」

「まあ：由美ちゃん、お父さんと手をつないで遊べたらいいなと思って…」

「よく見てよ、ほら、後ろの建物の玄関らしいところにある大きな丸が二つ、それに屋根の上にも」

「あっわかったわ、これトンボ村のトンボの家ね、都内でも飛んでいるトンボが見えると言うこと

でつくられたトンボ村、トンボの家はトンボ博物館のようなものだけど、一年生の遠足にどうかなあと下見に行ったことがあるのです、結局少し遠過ぎるってことになったのですけれど」

「じゃあ由美ちゃんは、お父さんといっしょにトンボ村に行きたいと言うことですか？」

「違うよ、もう行ってるんだよ」

「何？どうして？」

「夕子ちゃん、それどう言うことなの？」

「ほら、風船が付いた旗が立ってるでしょう」

「ええ……」

「私もね、トンボ村に行ったことがあるの、でも旗なんて無かったわ、だからトンボの家に電話して確かめてみたの、『あの旗はこの前のトンボ祭りの時初めて立てたんですが、祭りが終わった後は仕舞っています』だって、由美ちゃん、まだ行

ってないのなら、どうして旗のこと知ってるのよ」

「ううん？」

「そうか：私が行った時も確かに旗は無かったわ、あつそうだ！一年生ね、朝の自由学習の時間に毎日日記を書いているんです、家だどうしても書き忘れる子がいるでしょう、由美ちゃん、もしかして：」

「なるほど日記ですか、それに書いてあれば：」

「あつたわ！ほらこれ！」

おとうさんとトンボまつりに行きました。大きなわたあめを食べました。おひるは、おうどんを食べました。トンボの家のいりぐちには、大きなまるがふたつついていました、まるをふたつ書いたはたがっぱいたててあります、あれはトンボのめだまのしるしだよと、おとうさ

んがおしえてくれました、わたしはトンボのめがねだなおもいました。たのしかったです。まるがふたつのおまつりだけど、こんどはみつつのやくそくをしました。

「由美ちゃん、本当にトンボ祭りに行ってるんだわ！」

「ううん…そう言うことになりますね、そうか！それで夕子君、君は、由美ちゃんはまたお父さんと一緒にいるんだと…」

「由美ちゃんね、およばれ給食の時にトンボの眼鏡の歌を歌ってくれたの、トンボ村に行ったことがよほどうれしかったんだと思うよ」

「およばれ給食と言うのは、上級生を何人が招いて一緒に給食を食べる会です、上級生からはおよばれ、一年生からはおまねき給食、じゃあ夕子ちゃん由美ちゃんのクラスに行ったのね」

「うん、その時由美ちゃんの絵は、ほかのみんなと違ってるなと気づいて、そのあと由美ちゃんがいなくなったでしょ、だから確かめたの」

「それで、みんなに、由美ちゃんは心配ないと…」

「そう、でも由美ちゃんのお父さん、家に帰っていないでしょう、何かわけがあるのね、だったら、日曜までそつとしておいてあげた方がいいんじゃないかと思ったわ、だから陽子や真子たちにはお父さんのことは話さなかったの」

「うん？日曜までって、どう言うことだい、明日は日曜だよ」

「うん、ねえ真子のお父さん、明日もう一度私とデートしない、今度は真子も一緒に」

「ううん？」

「そうしたら由美ちゃんがきつと見つかるよ」

「と、言うことです、念のため由美子の母親に会って、先の日曜日のことを聞いてみました、由美子のお昼だけ用意して店に出ていたと言うことです、休みの日でも割り当てで出なければならぬことがよくあって、子どもも慣れていたそうですね、ただいつもと違ってお昼を食べていなかったと言うことですが、近所に仲良しの友達がいるので、そこでごちそうになることがよくあるので、その日もそれだと思っていたそうです」

「ふうん、おうどんを食べました、と言う日記と矛盾しないわけだな」

「そうです、それからこれが父親の写真です、捜索願いが出された時にも出してもらっているのですが、署に一枚あるはずなのですが」

「そうか、うん？待てよ！おいみんな来てみる！」

「あつ、この男は！」

「コンビニ強盗じゃないですか、N署が指名手配している！」

「間違いないですよ、N署に知らせますか」

「待て！あの日曜日には子どもを連れてトンボ祭りに行ってるんだらう、強盗をやったのは何時ごろだ？」

「十時過ぎと聞いています、普段でも住宅街ではないので朝は出勤者で賑わい、十一時を過ぎると昼食を求める客で混雑するものの、その間の客はほとんどない、それに日曜だったので、客は一人もいなかったと言うことです」

「十時だとすると、この男が強盗をやれるか？」

「トンボ村に行ってるのが本当だとすると、到底無理ですね」

「わかった、宮本、N署だ、竹下と根岸はトンボ

の家だ、今からでは少し遅いな、電話してから行
け、あつ待て根岸！明日はその夕子とか言う子と
デートしろ」

「夕子、キッズフェスティバルと言っても、あ
のポスター幼稚園から二年生までが対象と書い
てあつたじゃないの、私たち五年生よ」

「一年生と一緒に踊るんじゃないよ、由美ちゃん
を探すの、真子も由美ちゃんを知ってるでしょ、
私一人で探すよりいいと思つて」

「夕子君それだ、由美ちゃんがどうしてもそこに
いと」

「由美ちゃん、日記に書いてたじゃない、今度
は三つの約束したよ、つて」

「ううん？」

「ほら、丸が三つ」

「わかった、夕子、それ三輪公園のことでしょう、フエステェバル会場の」

「そうよ、案内のポスター丸が三つ描いてあるじゃない、由美ちゃんあれを見たのよ」

「そうか、私は何かの約束を三つしたと言うことだろうと思っていたんだが」

「由美ちゃん、日記書いてるなんて知らなかった、でも三輪公園に行くんだなと言うことは、日記を見る前からわかってたの、だから真子にも言ったでしょ、由美ちゃんのいるところは日曜日にわかるって」

「しかし、どうして？」

「私ね、由美ちゃんの絵の裏を見たの、そうしたら三つの輪やお父さんなんか描きかけになってたわ、あの絵の題は、できたらいいな、でしょ、約束通りお父さんと三輪公園に行けたらいいな

と描こうとしたのね、でもまだ行ってないのでど
んなところかわからない、だから楽しかったトン
ボ村の絵に変えたんだと思ったの」

「わあ！大勢来てる！これじゃ由美ちゃんどこ
にいるかわからないよ…」

「ほんと、陽子たちもさそって、みんなで探せば
よかった」

「困ったな、どこだろう？」

「夕子お姉さん！」

「あつ、由美ちゃん！」

「わあ、真子お姉さんもいる、お姉さんたち踊り
にきたの？」

「う、うん…由美ちゃん、探したのよ、由美ちゃ
んは私たちがよくわかったわね」

「すぐわかったよ、お姉さんたち大きいから」

「そうか、小さい子はいつぱいだけど高学年は二人だけだから目立ってたんだ」

「で、由美ちゃん、お父さんは？」

「ほら、あそこのベンチにいるよ」

「ああ、あの人ね」

「そうか、あの男性だな」

「あつ、真子のお父さんちよつと待って！」

「うん？どうして…」

「あなた！」

「と、俊子…」

「わあ！お母さんも来てたんだ！」

「由美ちゃん、よかったね、三人になれて」

「気が付いたら、病院のベッドの上でした、ところが、どうしてそんな所にいるのかわからない、それどころか、自分が誰だかわからない、自分の

名前が思い出せないのです。

退院すると会社の寮に入りました、そこで私の名は山本健一、その会社の作業員だと教えられました、ちよつとした事故で入院してもらったと言うのです。

のち、事務をしている女性がそつと教えてくれたところによると、本当の私は山本でもなければ社員でもない、偶然工事現場を通りかかった私の上に建材が落ち、それが頭に当たったのだそうです、しかし会社は、私が記憶を失っていることを知って、作業中自分で何かに頭をぶつけたと言うことにして、会社の責任になる事故を隠してしまつたと言ふことでした。

しかし、私はそれについて、何も言わず知らない振りをしていました、自分のことは何もわからない、これからどうすればいいのか、どこに帰れ

ばいいのかもわからない、寮を出ても寝るところもないのですから、そのまま働いている方がよかったです。

ただ自分が何者かは知りたいたいと思いました、そこで休日には事故にあつたあたりを中心に、あちこちをぶらぶらと歩きまわりました、誰か、元の私の知人にでも出会わないか、そして何かがわからないか、それが目的でした、そして先の日曜日のこと、歩いていると突然『お父さん！』と呼ばれたのです。

お父さんだと！見ると小さな女の子でした、じやあこの子は？いや人違いをしているのか？一瞬判断に迷いましたが、ともかく聞いてみようとする子どもの手を取ろうとしたとき、通りがかりの人から、不審そうに眺められているのに気づきました、相手は女の子だ、不審者とみられてもおかし

くはない、それに気づいて思わず、「あ、そうだ
ほらそこに出ているトンボ祭りに行かないか？」
と言ってしまいました、すぐ前に張ってあったポ
スターが目に入ったからです、子どもは『うん、
行く行く』と喜んだので、すぐタクシーを拾いま
した。

祭りの会場でいろいろと聞き出しました。もつ
と大きな子だとおかしいと思われたでしょうが、
「大勢の人だな、もし迷子になったら、お父さん
やお母さんの名前がいえるかい、住所は？」など
と聞くと、『だいじょうぶだよ』と、すらすらと
答えてくれたのです。

二人が出会ったところまで帰ったとき、私は迷
いました、この子が本当にわが子なら、私の本名
も妻の名も、住所までわかったことになります、
ところが、ただそれを知ったと言うだけで実感は

何もわからないのです、ほかのことを思い出すことも何もない、この子の家まで行って、人違いだつたら騒ぎになるでしょう、本当だったとしても記憶がないままで帰っていいのだろうか？と言うことでした。そこで私は、手がかりは得られたのだ、もう少し調べてみよう、自分で確信が持てるまでと考えました。

「由美子、お父さんはね、今とても大事な仕事をしてるんだ、だからもうしばらく帰れないんだよ、お母さんがびっくりするといけないから、今日のごことはお母さんには内緒にしてくださいませんか、あつそうだ、今度はほら、そこに張ってあるポスターのキッズフェスティバルに行こう、今度の日曜だ」と言うと少し不信そうでしたが、『本当、本当に連れてってくれる』『本当だよ、約束しよう、代わりにお父さんのお願いも守ってくれる』

ね」と頼むと『うん、約束する』と言うことで別れました。

帰った私は、すぐ寮を出ました、ここには毎日仕事だ、それでは自分探しができなくなってしまう、そう思うと、手続きも何もしないで寮をとびだしたのです、少し興奮していたせいもあったのでしよう。

その夜は、ある飲み屋の二階に泊まりました、おばさんが一人で切り盛りしている小さな店ですが、そこには仕事仲間が行かないことを知って、私は毎日のように通っていました、仲間にいるいろと尋ねられるのが嫌だったからです、おばさんは、私が記憶喪失だと言うことを知っていました、いろいろと親切にしてくれるので話したのです、「今日、娘らしい子に会った」と言うとおばさんは驚いていたようですが、「会社は辞めた明日か

らは自分が何者かを本気で調べる、事故の見舞いだと給料以外にも少しもらっているから、当分は何とかなるのだが、どこか安い宿はないだろうか」と言う意味のことを話すと

『うちの二階が空いているから、そこを使いなよ、閉店後は一人だからいつも心配でね、男がいてくれると心強い、料金なんかいいからさ』と喋ってくれたので甘えることにしたのです。

翌日、昼食を食べながらテレビを見ていて驚きました、私が、コンビニ強盗の容疑で指名手配されているのです、山本健二と言う名前も顔写真も出ています、私に違いない、しかしなぜ？私は何がわかりません、そんな馬鹿な！と、すぐ警察へ駆け込もうとしたのを止めたのはおばさんでした、「待ちなさいよ！指名手配までした警察が、身に覚えがないといってもすぐ信用するわけが

ないだろう、留められてしまったらどうするの、せつかく娘さんらしい子に会って、手がかりが掴めたと言うのに、しばらく様子を見てる方がいいと思うね」

結局警察には行かず隠れるようにしていたのですが、我慢できなくて、あの子の言った住所の近くをうろろしたのが金曜日でした、そこでまたあの子に出会ってしまいました。大きなマスクで顔を隠していたのにあの子にはわかってしまったのです、『お父さんのところへ連れてって』『「だめだよ、お父さんね、今大事な仕事なんだ」』といくら言ってもこんどは『嫌だ』と言うばかりで聞かないのです、日曜日に会った時のような元気はなく、聞き分けようとしないうでぐずるばかり、学校で先生に叱られるか、友達と喧嘩でもしたのでしょうか。

大きなマスクの男と嫌がっている少女、それを見た人に交番へ通報でもされたら…先の日曜のことだったらその子が『お父さんだよ』と言ってくれるだけで済んだでしょう、しかし今の私は、指名手配をされている身です、仕方なく飲み屋に連れて行きました。

『かわいい子じゃないの』おばさんは驚いたもののすぐ優しく接してくれました、そして店を閉じると、いろいろと話しかけ、聞き出してくれました、私のように名前や住所だけを聞いたわけではありません、『ねえ、お父さんとお母さんと一緒に動物園に行ったことはないの?』『海に泳ぎに行かなかった?』『病気になったことあるでしょう、お母さん優しくしてくれたんじゃないの?』由美子は思い出しながら『うん、行ったよ』などと素直に答えています、それを聞いているうちに、

私もなんとなく思い出してきました、そうだ：あの時由美子が迷子になったんだ：慌てて探している、『かわいいおじょうさんが、迷子のお父さんとお母さんを探しています』と言う放送があったのに、砂遊びに夢中になって、帰ろうと言っても嫌だと駄々をこねた：真夜中に高熱を出して慌てさせた：由美子が話したのではありません、私の頭の中に浮かんできたのです、由美子だ！間違いない！由美子だ！霧が晴れると言う表現がこれでしょうか、私はほぼ全てのことを思い出しました、と、同時に、母親が、いや妻が心配しているに違いないと気づきました、帰さなくてはいけなしかしもう暗くなっていました。

翌日すぐ連れて帰ろうと思いました、一晩泊めたのですから、内緒にしては通じません、それは

かまわない、もう自分の正体がわかったのだから！『だけど、由美ちゃんや奥さんの前で警察に連行されることになってもいいの、まさかとは思うけどね、警察に行くならここから一人で行った方が、由美ちゃんは私がそつと帰してあげるから』おばさんがそう言ってくれたので、それはそうだと頼もうとしたのですが、それを止めたのは今度は由美子でした、『お父さん、キッズフェスティバルあさつてだね、早くあさつてになったらいいね』私はハツとしました、そうだ約束があったのだ、警察に出頭すれば、まず約束を守ることができないだろ、しかし妻が…私は迷いに迷いました、『そりゃあお母さん、死ぬほど心配してるだろうね、よくわかるよ、でもねえ、ここはお父さんとして娘との約束を守った方がいいんじゃないの…』と言ってくれたのはおばさんでした」

「我が家に帰ったのはほぼ一年ぶりでした、刑事さんに、それができたのは、夕子と言う小学生のおかげだと教えられました、夕子さんの所に、由美子と妻の三人でお礼に行ったところ、夕子さんは、『私じゃないよ、お父さんは悪いことなんてしてないって証明したのは由美ちゃんだよ』と言って、自慢そうな顔一つしないのです、夕子さん、すごい子ですね、由美子は、『夕子お姉さん、お姉さん』と呼んで懐いています、本当にこんな子が由美子のお姉さんになってくれたら、由美子もいい子で育つに違いないと…」

「たった一枚の絵から、由美ちゃんはお父さんという、日曜日には会えると預言して、ぴたりと当てたんだ、まったく夕子君と言う子は…」

「お父さん、夕子が怒るよ、夕子はね、預言なんかしないって前に言ったでしょう」

「あっそうだったな、取り消し、預言者は幽霊になってもらって、かわりに名探偵の登場だ、そうだ、公園に由美ちゃんのお母さんを呼んでいたのも夕子君だろう」

「そう、由美ちゃんのお父さん、由美ちゃんに会っていながら家に帰っていない、それじゃあ由美ちゃんかわいそう、どんなわけがあるのかはわからないけど、お母さんに会ったら帰るんじゃないかなと思ってたって」

「そうか、そうだ、由美ちゃんたち、夕子君にお礼に行ったそうだな、私も行かないと」

「夕子ね、日曜日のキッズフェスティバルに行くと由美ちゃんに会えると言う手紙を由美ちゃんのお母さんの買い物籠にこっそり入れたのね、で

も後は何もしないで、知らない振りをしてるつもりだったって」

「ううん、それじゃあ夕子君を引つ張り出したのは迷惑だったのかな？」

「だいじょうぶよお父さん、夕子喜んでいたわ、由美ちゃんのお父さん、自分が手配されてること知ってたんでしよう、『真子のお父さんが、手配は取り消しだと話さなかったら、また姿を消してたかも、消えてなくても、警察へ出頭するといつて、由美ちゃんやお母さんを驚かせているわ、三人がそろって無事家に帰ったのは、真子のお父さんのおかげよ』だって」

「そうか、お父さんも少しは役にたったんだな」

「フッフ、本当は夕子に利用されたのよ」

「何！」

「夕子ね、由美ちゃんのお父さんが指名手配にな

ってること、テレビ見て気づいたのよ、『あれは間違いだとすぐわかったわ、でも私には何もできないでしょ、だから真子のお父さんをね』って」「なんだと！夕子君、ケーキを食べたから仕方ないとか言って…本当は私の方が引つ張り出されることになっていたのか…」

「あつ、お父さん！夕子とケーキ食べたの、ずるい！」

「バレたか、よしこれから夕子君をさそってケーキを食べに行こう、真子もいっしょに」

「だめ、夕子いないよ、由美ちゃんのお父さんが、夕子のことテレビ局に話したのね、それで記者が押し掛けたの、夕子『しばらく幽霊になってる』といって、親戚の家に行ってしまったわ」

了

贗作幽霊預言者

<http://p.booklog.jp/book/105062>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105062>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105062>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ